明治四十二年十一月十五日

卯花

第參拾六號

中央歌文會出雲平田支部

明治四十三年一月本會兼題及支部十二月分兼題

○本會兼題　新年勅題の詠進を許し給ふをかしこみて　新年　旅

○本會競点題　年内立春

○本會初學兼題　門　松

○支部兼題　寒衣　衾　落葉　埋地

右來る十二月十日迄に當支部幹事へまで御送りを乞ふ

卯之花第參拾六號

◎平田支部にたくる

野崎英夫

實りもゆたに千町田の
平田のさとにさく花は
こかねの花か時しらす
白かね匂ふ花うつき

○支部雅會の景況

十一月七日午後來間幹事の寓所に開く出席者は高橋香雪、山岡文枝本多直愼、母里春草、小村水石、木佐和久と主年枝との七人にして兼題詠草互評は例の如く尙ほ去月長逝せし詞友原不咨氏の爲に追悼兼題を『秋懷舊』と定め一同の出詠を求むる事として散會せり

○菊いろ〳〵

（天長節に詠める）

寄菊祝　うへしこそわか大君のしるしなれ菊の盛の久しかりせは　木佐和久

垣菊　わか宿の垣根の菊の咲きしより門ゆく人も足そとゝむる　同

田家菊　豊なるみのりは秋に咲き出つる野邊の伏屋の菊そ目出度　同

愛菊　白銀も玉もれよはぬめてたさは園生にさける白菊のはな　同

水邊菊　すみわたる水の底にもかけ見えて堤のほとり秋菊の咲く　同

公園菊　昨日今日園生の菊の咲きしより遊ひの人の足そつゝける　同

雨後菊　ふる雨にうき世の塵もあらはれて菊の姿はいよゝ清けき　同

翫菊　菊の花さき出てしより淋しくもくれなん秋のうさ忘れ筒　來間年枝

上品菊　さま〳〵の色香はあれと白かねも黃金もしかぬ黃菊白菊　同

培菊　培ひしいさをは花にあらはれて樂しきものは菊作りなる　同

菊露　咲しより散る事しらぬ菊の上におけるは露も嬉しかる覽　同

菊似星　たく露に月の光のさし添ひて星かと見ゆるしら菊のはな　同

菊多種　花の名をしるしゝ札の數たほみ品さためんもかたき菊哉　同

曉庭菊　ありあけのかけの殘ると見ゆる迄庭もせに咲く白菊の花　小村水石

菊薫風　垣の内花のすかたは見えねとも風薫るなり菊やさくらん　同

栽菊　とし〳〵にかはらよもきを我庭に栽て老せぬ友垣にせん　同

名所菊　大井川するくむ袖もにほふなり水上の菊さかりなるらん　同

故郷菊　昔我植ゑてなかめし故郷のかはらよもきの花そなつかし　小村水石
隣家菊　むつましき隣へたつる菊畠これそまことの千代の友かき　同
禁庭菊　大君のおほみしるしの菊のはな七重に八重に九重にさく　同
菊初開　かひこそあれ君か千年を祝はんと培ふ菊のけふそ匂へる　木佐忠久
挿菊　大君のあれまし〻日を祝ひつ〻瓶にやさ〻ん千代の白菊　同
菊盛久　百草のうつろふ頃もしら菊は霜いたゝきてなほ匂ふなり　同
行路菊　行く野路に咲き匂ひたる菊の花くれ行く秋の形見なる覽　原彩雲
谷菊　吹く風もさはらさりけり山深き谷間の菊やさかり久しき　同
野菊　さかりにし秋の七草かれはて〻獨りときめく野邊の白菊　同
庭上菊　五月雨にぬれてうゑにし庭の菊今を盛りの色もとり〳〵　同
菊爲友　ひと訪はぬ庵の籬に咲く菊は千代へん老の友とこそ見れ　同
故郷菊　野となりてつちかふ者もなかりけり昔の庭に咲くや白菊　同
終日見菊　咲き匂ふ菊の色香にあくかれて今日も籬のもとに暮しつ　同

寄菊祝　日の御子の稜威の光さしそめし今日のよき日に仰く嬉さ　山岡文枝
學苑菊　そへ竹のまに〳〵育つ菊のはな學ふ童のかゝみともなる　同
菊花章　大君のしるしの譽はなの色に見せつゝかをる庭の白きく　同
庭菊　めてたきは老いせぬ色に咲き出て庭にかをれる白菊の花　同
山家菊　たけ狩も忘れてしはし見とれ鳧山家に咲ける菊の色香に　常松晋宏
雨後菊　雨はれて色香まさりし菊の花いよ〳〵千代の根さし也鳧　同
菊宴　暮れてゆく日あしもしらす千代迄と菊の影くむ宴樂しも　同
雨後菊　時雨ける名殘の色はしら菊の花につゆそう今朝の庭のも　黑田麻山
野徑菊　なか〳〵にゆかしかり鳧道もせに已かまゝなる白菊の花　同
菊薫風　何處より薫る風かも白菊の花のありかを知るよしもかな　同
曉庭菊　しの〻めの星の光もしら菊の花おもしろく霜にあけゆく　同
栽菊　咲きいてし菊の光りは春夏の心をこめしいさをなるらむ　木村翠月
旅宿菊　きくの花にほへる宿に一夜ねて千歳の夢を結ひつるかな　同

禁中菊　開けゆく御代にたくひて奇種の花咲きにほふ菊の御園生　木村翠月

菊盛久　たく霜の色にきほひて雄々くも移ろふことをしら菊の花　同

菊花園　いかはかり心こめけん菊園のいつれ劣らぬ花のいろ〳〵　同

庭上菊　百草の花に混りて我か宿にゆかしく咲ける菊のひともと　古瀬勝良

菊盛久　我か宿に匂ふ千草にまされるは盛り久しき菊のひともと　同

閑庭菊　大方は庭の紅葉の散りにしを老てふこともしら菊のはな　同

水邊菊　千代もなほ老せぬ菊の下水に匂ひこほるゝ色そうつろふ　同

菊露深　白菊のいつれを本の花と見ん技もたわゝに露のれけれは　同

佳節菊　さま〳〵に咲く庭の面の菊の花ことほくけふの香高しも　飯塚如天

○山時雨（本會十一月分兼題）

山の名の嵐に紅葉ちりはてゝ梢さひしく降るしくれかな　池田正躬

見るか内に峯も麓も曇りけりいかにはけしく時雨ふる覽　同

峯ふかく時雨ふるらし山の端をよこきる雲の早くも有哉　糸原鐵軒

しくれまた一入のいろましてそめつくしたる峰の紅葉は　同

夕こす山路はいとゝ淋しきにうたてき雲は軈てしくるゝ　原彩雲

暮れて行く山の頂き雲出てゝ一きはしけく時雨降るなり　同

ぬれなから木の葉散る也嵐吹く高峰に今や時雨ふるらし　西村晩香

雲の上にそひゆる山路ふみ登る足もと近く時雨ふるなり　本多直愼

晴るゝかと見れはしくれて動なき山の姿も見えつ隱れつ　小村水石

富士の根に夕日のこして足拵の山めくりゆく村しくれ哉　同

紅葉ちる山の下みちかさし行く袂に時雨ふりそゝくなり　岡本重昌

山風に往來そすなる雲の脚いよ〳〵はやく時雨ふるなり　綿貫閑溪

今日も又時雨ふるらし朝またき外山の峰にまよふむら雲　勝部政太郎

遠山は夕日のかけのさしなから片山さとは時雨ふるなり　同

いたゝきは嵐の上にあらはれて山の半はしくれ降るなり　河口鏡花
大空は晴れ行く風のさきほへて山より山に時雨ふるなり　同
足ひきの山にかゝれる初時雨紅葉も秋もなかれゆくらん　玉木雪華
秋くれて千々の色そふ山々を尙そめんとや時雨ふるなり　同
頂きは夕日の影のさしながら山ふところに時雨ふるなり　高橋香雪
淡く濃く木々の紅葉を染め渡し時雨は今日も山巻りせり　同
山の端の晴れみ晴れすみしくるゝは定め無世の姿なる覽　永江峯穹
袖ぬらし歸る木こりにこと問へは外山の雲は時雨なり鳧　同
染めつくす峰の紅葉や散りはてん山本くらくふる時雨哉　來間年枝
里とほみたとる山路に初時雨しはし宿らむ椎の木のもと　黑田麻山
晴れ間とて急く山路を乘る駒のいき束の間に時雨降る也　同
稻荷山高嶺の杉の青葉すらしくれて見えぬ冬のそらかな　山岡文枝
山雲のいよゝかさみて空に滿つ時雨と也て四方に降る也　同

晴わたる紅葉の山に暮うつは山のは傳ふしくれなりけり　山根碧雲
おりなせる山の紅葉の色そふは幾度經たる時雨なるらん　同
よこ雲もまた立露もあるものを時雨にくるゝさ夜の中山　古瀨勝良
昨日まて紅葉なかめし山かつの今日は時雨に雨宿りして　同
夕日さすふしの高ねはあらはれてむら時雨ふる足拵の山　小林醉香
峰の雪ふもとの里は殘しにきてなかはのみ降る村時雨哉　同
をり〳〵は山の時雨に袖ぬれてにち栗拾ふ子らもあり鳧　手錢鏡水
冬かれていとゝ淋しき山里にいくたひかふる時雨なる覽　同
今日もまた曇りもあへぬほともなく山かき暮す村時雨哉　青木素翠
散りはてゝ紅葉は敷ける山道に空さためなくふる時雨哉　同
木の葉散る音もましりて時雨ふる深山の奥は淋しかり鳧　木佐和久
冬されは木々の梢もみえすきておとなふものは時雨也鳧　同
たけ狩りの得物もなくて夕まくれ歸る山路に時雨ふる也　木村翠月

三笠山たか根に月はみえなからかすかの森に時雨ふる也　木村翠月
定めなき空にもある哉遠山はいつしか見えて時雨ふる也　木村つね
夕日影峰にさすかを見掠山またもくもりて時雨降るなり　水谷悠山
遠山は雪やふるらん山の端は昨日も今日もしくれ〳〵て　元井素居
足曳の山の深みもしられ鳧しくるゝ中をましら呼ひつゝ　同
炭かゝのけふりの立つと思ひしは山を越え來る時雨也鳧　角清矣
杣人もかへり路いかにいそくらん山は俄に時雨ふりきて　常松晋宏

離緣（本會十一月分兼題）

ひねやすき人のなさけは若草の我つまさへも捨つる也鳧　池田正躬
千代の後同じ穴にと契りたるかひなき人そあはれ也ける　同
思ひきや千世と契りし姫小松なみたの雨に別るへしとは　糸原鐵軒
別れては又逢ひかたきねにしかないかなる事の障ある覽　同
我か家とふかき契りをかさねんと緣の糸は結ひしものを　原彩雲
なさけなの限也けりいとし子を捨て迄さへねにし斷とは　本多直愼
契りてし二世のねにし唐衣たつよりもうき事やあるへき　同
いかにせん妹脊の契たねしとて覆へしたる水はかへらし　小村水石
同し世に在とはすれと今宵より逢ふに逢はれぬ身社つらけれ　同
白髪なす末迄かけし誓すらきれゆく世社うたてかりけれ　岡本重昌
今はゝや顔をうつさん甲斐そなきやさし鏡の歎き見る目に　河口鏡花
こほしてし水盛返す術もなくあらぬ歎そ身にはつもれる　同
去られてし吾行先もしら露のたのみなき身は思消えぬる　玉木雪華
去られても嬉しと思ひし新枕いつ迄しのふ我身なるらん　同
こほしたる水は器にかへらしの敎きく身やいかに悲しき　高橋香雪
いもとせの中のかけ橋たえしより涙の淵そいや增さり筒　同

むすほれし縁の糸はきれにけり繰返しても思ひわふらん　常松晋宏
千代經へぐ契結ひし中なれは別るゝ今日の身社つらけれ　永江峯穹
千代迄と結ひし物を波風に吹かれてとくる仇しちきりは　同
妹脊山千代の高ねももろ共に越えん越さんと契りし物を　來間年枝
妹と脊のあかぬ別れに世をかこち昔を忍ふ我なみたかな　黒田麻山
契こしえにしはきれて葛の葉の恨みやいかに野邊の秋風　同
うら寒く霜おきわたす明方にいなんといてゝ行妻あはれ　山根碧雲
思きや千代を契りし我妻と今日は別れてえにしたつとは　山岡文枝
玉の緒はたえてもたゆぬ縁さへ別れてたちぬ妹と脊の中　同
相思ふ事もいつしか絶ねはてゝ思ひたもはぬ憂世なり鳧　古瀬勝良
相たもふ心はいとゝ増鏡やれてはかけもうつさゝりけり　同
かくそとは知らて結ひの神掛て契るねにしの糸もきれ鳧　小林醉香
夫をすて愛兒を殘しかへる身を結ひの神はなと守らすや　同

結置しねにしの綱のゆるきけん別て逢はぬ身とそ也ぬる　手錢鏡水
定めなき物とたもへは味氣なき縁の糸のきれしこゝろを　青木素翠
思ひきや百年迄と契りしを仇しこゝろとなりはてしとは　同
あたゝかき春の日かけは夢にして淋しき秋の風そ誘へる　木佐和久
たもひきや出雲の神の結ひてし縁の糸のたねにけるとは　同
固めたきし伊香保の契り逗子の濱浪に碎くる浮世悲しも　木村翠月
七草の去るてふ草はなきものをなにを恨みに仇風の吹く　同
嫁振も身のふり行も知らぬまに縁絶しと聞くそうたてき　木村つね
うつし世につらき別は百年の縁たゆてふことの葉にして　同
縁子をあとに殘して歸りゆく嫁のこゝろや苦しかるらん　水谷悠山
再は元にかへらぬわか身かな庭にこほしゝ水とれもへは　同
家の名を讓るへき子か已か身を慎まさるそうらみ也ける　元井素居
百年の契りも仇となりぬるは月にくもりか花にあらしか　同

嫁けは去られましとし思しに其かひも無き今日の別れか　角　清矣

○橋霜（本會十一月分初學兼題）

さらぬたに危き谷の丸木はし霜たく朝はことさらにこそ　池田正躬
學舍にいそしむ子等かあと見ねてあさ霜さむし里の板橋　糸原鐵軒
霜のおく谷のかけ橋紅葉はの散れるこゝちの鳥の足あと　原彩雲
有明の月かけやせてたく霜の光身にしむさとのいたはし　西村曉香
さね渡る月の光とまかふかな笠津の橋にたけるはつしも　本多直愼
有明の消ねゆくまゝに板橋の霜の色こそ見ねわたりけれ　小村水石
餌をあさる小鳥もたねて曉の霜おきわたす里のいたはし　岡本重昌
板はしにたく初霜にあとつけて我より先にゆく人やたれ　勝部篤貞
おきわたす冬の景色もおもしろし里の柴はし霜のはつ花　河口鏡花

さね〳〵し月夜やいかに更にけんいつしか結ふ橋の霜哉　玉木雪華
霜さゆる月は枯野に影おちて板橋しろく夜そあけわたる　高橋香雪
いつの間にかくは降りけん置霜は橋の上白く寒けかり鳧　常松晋宏
冬深くなりにけらしも橋の上に見るも寒けく霜そ置ける　永江峯穹
さよ更けて渡る音さへさゆる哉たく霜白し里のいたはし　來間年枝
朝まだきたく霜の上のあとゝへは猿なり鳧木曾のかけ橋　黑田麻山
谷川の早瀨にかゝる丸木はしたく霜白くわたりかねつゝ　山岡文枝
朝寒や橋にたきにし初霜に人のゆきゝもかそへられけり　山根碧雲
板橋にたく霜しろきあした哉渡らは人のいかにとかめむ　古瀨勝良
霄の間のねやの寒さも知られけり橋の上白しけさの初霜　小林醉香
あら駒に誰かはのりて渡りけん霜にあとある橋の上かな　手錢鏡水
このあさけ水音高く風さえて霜たきわたす谷のかけはし　青木素翠
今朝見れは門の板橋たも白くわたるに惜しき霜のはつ花　木村翠月

橋の霜見るさへさむし曉にわたりし人はいかにありけん　木村つね
小夜深く足音たえぬいた橋もけさはま白に霜それきける　水谷悠山
いかつちの燈火白くかゝやける橋の上寒く霜はれきけり　元井素居
朝ほらけ行く道々はさもあらて橋の上白く霜そむすへる　角清矣

○紅葉を人に贈る　（本會十一月分競点題）

青葉より君にと思ひそめてけりたくる紅葉は一枝なれ共　池田正躬
文机の上にかさしてはつ紅葉初瀬たつたを忍ひませ君　原彩雲
君まさはともに歌はん我庵の紅葉はかくも色つきにけり　同
今君にれくる紅葉はいと赤きれのか心のまことゝそしれ　玉木雪華
我園の秋の深さもしのひませ君にそれくる紅葉ひとえた　同
初紅葉一枝を君にれくる也染めつくすへき庵を訪ひ來よ　來間年枝
我か里の梢はかくも染てけり尋ねてもみよ雪ふらぬまに　黒田麻山
色ふかき心をこめしこの紅葉れくらはいかに君は見る覽　同
これをもて君か心をなくさめん色こき紅葉一枝れくりて　山岡文枝
うつくしさ色こき紅葉れくる也慰めたまへ君かこゝろを　同
ことさらに折れる紅葉は我宿の秋の深さをいろにしれ君　藤原櫻塢
山つとの一枝なれ共はつもみちけふの錦のなかめ分たん　同
なかめませ色こく染めし紅葉はゝ龍田の山のひめのさ衣　青木素翠
君をれもふ赤き心をくみてましたゝ一枝のもみちなれ共　木佐和久
山里にすめるはかりにさゝけてん早くも染し紅葉一枝を　同
やま姫の錦れりにし山さとの秋を尋ねんしるへにもせよ　木村翠月
取あへす紅葉の一枝まゐらせん文机かさる助けにもやと　元井素居

◎假名つかひの速學び

和訓ノ假名遣ヲ學ブニ要スル注意左ノ如シ

(一)假名遣ヲ覺ユルニハ類似音ノ假名ノ中ニテ用ヒラルヽコトノ寡キモノヽミヲ記憶シ多キ方ヲ推知スベシ

(二)頭ニはひふへほヲ置キテわゐうゑをいえと呼バズト知ルベシ

(三)音便ノ假名ニひふヲ用ヒテいうト呼ブコト無シト知ルベシ

(四)語ノ意味ヲ考ヘ語源ノ同一若クハ因縁アルモノハ同一ノ假名ヲ用フベシ

(五)動詞ハ其活用ヲ轉成名詞ハ其語源ヲ考フベシ

和訓ノ假名遣ニテ混ジ易キモノハ左ノ如シ

(一) わ・は・

(二) ゐ・い・ひ・

(三) う・ゆ・ふ・

(四) ゑ・え・へ・

(五) を・お・ほ・

(六) じ・ぢ・

(七) ず・づ・

此區別ノ概要ハ左ノ歌ニテ知ルコトヲ得ベシコハ大和田建樹氏ノ原作ニ數首ヲ增補セシモノナリ

(一)は・わ・

皺 俵 乾 周章 泡 騒 爽 弱 鰯 理

諺ニ 所業 聲色 轡 大輪 吝 据ニ 野分 腸

鸚 郭 烏芋 撓 ノ外ハ皆は・文字ノ假名ヲ書クト知ルヘシ

(二)い・ゐ・ひ・

藍 鳥芋 基ニ 兒 位アル花ハ紫陽花 草ハ 紅

井 蟋蟀 田舍 蘭菟 居 豕 膝行ト 乞食 率テヤ 參ン

櫂ニ 悔 老ト 報ハ いろはノい・其他ハスベテひ・ノ假名ヲ書ク

(三)う・ゆ・ふ・

わトいトヲゆ・ノ字ニ變ヘテ聞ユルハうヤふ・ヲ書カヌ詞トゾ知レ

植 飢ト 据ノ三字ノ外ハ皆ふ・ノ仮名ヲ書ク詞ナリケリ

(四)ゑ・ゑ・へ・

醉バ　笑ム　槐ノ　梢　彫　剜　本末　机　巴　繪

餌ニ　飢ッ　植木ヲ　植ッ　鉢据ッ　蔟　杖　故　聲ニ　陶器

笛　小筒　鵺　鮠　榮螺　其外ハゆノ字ニカハル　見　消ノ類

（此外頭ハゐ腹脚ハへ）

（五）●れ　●を　●ほ

嗚呼　可笑　踊　戰慄　甥　拜　叔父　叔母（伯叔父母共ニ同シ）　男　女　小女子

一昨日ノ　魚ヲヤ　惜　折々ニ　檻ノ　川獺　呻　居ナリ

岡　岑上　荻ニ　小車　女郎花　尾花　鴛鴦　遠ノ　舟長

竿　功　操　梭　斧　青　香　萎　怠　敎　申ン

桶　苧穀　終　玉緒　稚モ　犯　治　十ニ　婉

（此外頭ハれ　腹脚ハほ）

（六）●じ　●ぢ

辻　旋風　雉　虹　蹂　鬮　折　彈　始　交　交

添　七ニ　主ニ　蛆　貉　鹿尾菜　躑躅　甚　短

櫨　羊　睫　頂モ　同コト　薑　食ヒテ　後退スル

慾ナ　聖　禁厭　棧敷ニテ　詰　避易　著キモ

（七）●ず　●づ

錫（鈴）　雀　百舌鳥　數　鼠　葛　蚯　蚓　硯　柚實　鱸　準

弭ヲバ　梢ニカケテ　傷包ミ　イ立時ゾ　漫然　凉キ

○都たより

和久

我雲州松江の出身にて、久しく常陸磯濱に住み、今は東都（芝區芝金杉濱町七一）に移れる歌文會友にて、其名も高き松田敏ぬしよりの頒信と咏歌とを得たれは、左に掲けぬ。尚、別信にて卯の花の同人作歌につきての批評、および編輯印刷の事々に至るまで、懇切に指摘垂教せられしは、深く謝意を表せざるを得ざる所也。

拙書拜呈、時下可親筆研、益御清穆、就中貴支部益御盛之由、可賀事に御座候。毎々卯の花御惠被下、難有仕合に奉存候。老生此初夏茨城より歸京、夙と寶津川の勝を思出し、西京に遊び、其序に探勝或は故舊訪問、播州龍野に抵り、一ヶ月滯留の

豫定に候處、新友も多く出來、長くなる内に、忽然猛暑と相成、避暑することゝ致し、海浴奥外遊暮し、歸路再度京攝に留り、天下大一の觀蓮所なる巨椋湖に遊び、岐阜藍川(通稱長良川なり)の鵜船を觀、半田常滑等に舊友を尋ね、此中歸京致候、又々紅塵十丈中の人となり申候、歸京早々海上翁の歌會に參席、其外雅事に相暮居申候。旅中の拙作山陰新閑に於て自然御覽被下候歟と存候。歸京後は至て少詠一二御咲草に供し申候(下畧)

川霧　筏師もまとはんはかり宇治川は秋霧ふかし朝な夕なに　松田敏

風筋はふきけされつる大井川くまことにこそ霧は殘れる

霧の海に橋やかゝれる行人は瀨田の渡りに見えかくれして

雲間月　山川は霧にかくれて我わたる谷まの橋は天のうきはし

月前雲　村雲は天ちの關かぬは玉のよわたる月は暫しとまれる

草花　をの〳〵は眼をやすめとや村雲はまゝすみの月に懸るなる蘭

虫　八千草のにほへる花はたな機のはたれり虫の織りし錦か

虫聲稀　たのしとも將わひしとも聞く人の心のまゝに虫はなくらん

海邊秋望　七草の花の錦の色あせて機織虫の聲かれんとす

鳴虫はうとく也鳧草花の枯れはてしよりいつち行きけん

打渡す意宇の海原秋はれて雁かね高しよめ島の上に

天長節　大方の山いろつきて秋こそは錦の浦は名にかなひけれ

折にふれて　いかにして祝ひまつらん大君のあれましゝ日の今日の此日を

岡本重昌氏　よそなから思ひしまゝの山里は人の心のたくにこそあらめ

二十五年夫　二十餘り五年はものか手馴琴しらへも合て千代やへなまし

婦の祝に　はたはりの廣き錦をしけるかと見ゆるはかりの秋の花園

百花園に遊　一年に花さかぬ日はなけれ共秋の千草はにしきなりけり

ひてよめる

歌の中に

課外

初秋　我か庭の桐の一葉にたく露をこほしてすゝし今朝の秋風　西村晩香

散りそめし桐の一葉に驚きて垣根の虫も秋をやつくらむ

仲秋無月　まちわひし人のこゝろをあたにして月の光をたほふ雲哉

諸人にまたれし今宵雨ふりて月のこゝろもくやしかる覽

田家雨　小山田のひたのなるこの音たえて稲城にかゝる秋の村雨　岡本重昌

池蓮　にこりなき池の汀のはちすはに宿るも清きつゆのしら玉

月前虫　小林醉香

虫の音のつゆとみたれて秋の夜はふみ所なき野邊の月哉

楠公　元井素居

なこゝろのいかて枯ちめや湊川千代に功の世に流れつゝ

月　村雲はあとなくちりて空は皆我ものかほに月のてる見ゆ

千町田にみのるをしねの波の上に澄こそ渡れ秋の夜の月

安來に赴きて　手錢鏡水

秋高く風ひややかに海きよく安來の里のこゝろよきかな

十神山海のたも青くうつりつゝ神の安來の時をしそ思ふ

仲秋無月　黑田麻山

三ヶ月の頃より待し望の夜のかひなく雨のふるか悔しさ

田家月　木村つね

穗に出し田つらの稻に月すみてこかねの色に露も見ね鳧

里月　綿貫閑溪

なく虫の聲もさゞ〳〵小夜ふけて月かけ清し簸の川の里

楠公　山根碧雲

湊川水にうつりし菊の香は千年もつきすにほひぬるかな

月見雅會を噂し待りて失題　青木素翠

卯の花の匂ふ垣根やいかならむ雲にかくれし月を仰きて

玉たれの内はゆかしと思ひきや吹きすさむなり魔風戀風

擣衣　玉木雪華

さえ渡る小夜にきぬたをうつ音のいとも憐に聞えける哉

仲秋無月

いかなれは待にしものをなとて又今宵の月に雨の降とは

庭草花

生ひ茂る庭の千草も花咲きてそよ吹く風にゆられける哉

夏野草

夏草を刈りゆく賤よこゝろして利鎌なふれそはなの數々

秋野千艸

ともすれは道こそ迷へ秋の野に匂ふ千艸の花に見とれて

秋風　西村晩香

此夏は嬉とたもひし風にしてなと淋くも今日は吹くらん

夕鴈

秋風の身にしむ夕窓あけてそらゆく鴈のこゑを聞くかな

落鴈

秋風の吹くや湖邊の霧はれて鴈のね落つる意宇の湖つら

殘菊

朝な〳〵霧いたゝきていやましに匂ふや冬も白菊のはな

深夜虫

鳴しきる庭の虫のね秋の夜のふけ行くまゝに澄まさり鳧

月あかき夜に女郎花山里にて秋の月

たのつからねさめ勝なる秋の夜に聞もさひしき虫の聲哉

露清く虫のねをかしいさや子ら月影ふみて庭めくりせん

露にぬれ風になひきて女郎花身をまかすへき方や求むる

世の中を遠くはなれし山里も月にはかゝる雲もありけり

村雲のかゝるを見れは山里も同しうき世の秋の夜のつき

贈答

富田果堂ぬしに　原彩雲

君をねて昔の友にめくり逢ふみやひの契り嬉しかりけり

同　富田果堂

今よりは共に歌はん言の葉の卯の花垣はへたてさりけり

返し

卯の花のかきに集ひてなつかしき君にそとはひ敷島の道

入會之折　富田果堂
原彩雲主に　黒田麻山
古瀬君の入會を祝して　古瀬勝良
黒田麻山、木村翠月兩君へ　平井啞聲
入會の辭　同
同　古瀬勝良
返し　小村水石

ことの葉の草摘みそめて敷島の道の門出と君にさゝけん
今日よりは月の桂のいろと香も卯の花垣に匂ひますらむ
已かゆく文路てらすはこも枕高麻の山の月にそありける
いさゝらはちふりの主と頼みつゝ共に遊はん言の葉の道
歌文の園生にゝほふ卯の花の垣ゆふとちとなるそ嬉しき
敷島の道のしるへとさきにほふ卯の花垣の蔭によらはや
卯の花の月をよすかにもろともに遊はんものよ言葉の道

○木佐主の玉章に接しいと〳〵懐しければ　長門部長杉山碧峯

仰きみる月の光にちりのみも暫しましろに見ゆる嬉しさ
八雲立いつも八重垣末かけて集へる友をゆめみけるかな

○會友山本福太郎氏の教育功勞者として本縣知事より表彰せられしを祝ひて

いやましに教の道につくすませ國の爲なり郷のためなり　木佐和久
かねてよりつちかふ功菊の香と共に高くも匂ひぬるかな　來間年枝
いや高く世に功績をつくしませ今日の祝ひを山本にして　小村水石
君かねし此度のほまれ我里の榮ゑ行くへきためしなる覽　原彩雲
かねてより學の道につくしたる君か功はあらはれにけり

○常松曉月ぬしの入營を送る

長閑なる日蔭仰きてをゝしくも出立つ君の榮えさらめや　木佐和久
つるき太刀軍ならしのいとまには言葉の花を手折ませ君　來間年枝
いさましき君か門出を祝ふかなわか大君の楯とならん身　原彩雲

○わのれ今年入營すとて

敷島の大和こゝろを一筋に君にさゝけてつかへまつらむ　常松曉月

○玉木雪華ぬしの入營を送るとて

しきしまの大和心のをゝしくも君の御楯といそしめよ君　木佐和久
雪ふらん冬にめされていさましきみ國の華と歌はれよ君　來間年枝
つとめませすら武夫の美道國のためなり家のためなり　小村水石
えらはれて我大君にめされつる君かいてたち勇ましき哉　原彩雲

○黒田麻山氏の功績　幹事　年枝

大原郡加茂村終身會友黒田麻山氏は熱心に多數の會友を勸誘せられ今又同村附近の會友諸氏と計りて雅會を開き本會及び當支部の兼題を詠出し尚ほ毎月詠草集を謄寫版に

附する事等主として盡力せらるゝは本會及ひ支部の爲に益々其盛大を來たすの結果となるへく一同の感喜に堪へさる所なれはこゝに特筆する事しかり

雅會の景況（霜月轉載）十一月四日午後雅會を黑田麻山の居に開きしに古瀨勝良、木村翠月、河口鏡花と主との四人にして兼題及び當座題「惜秋」を詠出互評し將來會運の隆盛を談し麻山の供せし晩餐を共にし淸談に更のたくるを覺えさりしと

當月詠草集は号を「霜月」と命したり

惜　秋　　勝良

さらてたに時雨〳〵て暮れやすき秋の日影の殘り少なき

紅葉はをさそふ嵐の音さえていまさら惜しき秋の暮かな　　翠月

暮れ行くを惜む心に糸すゝき招くかゆらく秋のわかれ路　　麻山

萩すゝき箒なから咲く野邊にいつちいそきて秋の行く覽　　鏡花

○豊　秋　　出雲　元井素居

早苗植ゑし頃より五月雨はつる頃までは雨天多きに過きて秋のみのりの程もいかゝあらんと氣遣ふはかりなりしが七月中頃よりあつさつゞき雨無き事はや幾十日に及ひぬれは井の水さへつきはて雨乞の祈禱も初まり水分の喧嘩も起るなどいつこの里も狂氣にそ見え渡りけるかゝる程に立秋となり雨も時々降りきぬかしこ此處の田の面にみのる雀知らすとは名のみにて雀はこれこそ我等か久しく待けれといはんばかりに群立來れは鳴子に案山子に野は賑はしうなりにけり

早稲みのる頃待鳧と我先に群るゝ雀のにくゝもある哉

やかて二百十日も二十日も三十日も思ひ煩ふ事なくすきゆき加之ならす虫の難もなれは早稲は刈るへく中稲晩稲は早穗かゝみて二三十年の中にかゝる年並はあらさる程に美しうみのるへく見ゆるそうれしき事の限りなる

吹荒ふ風を鎭めて民草をめくませ給へ天地の神

○湖畔の朝　　山根碧雲

秋の曉は隨分寒い、ぞつとする樣だ、湖のほとりに佇むと、一面に霧立ちこめて三間前も見る事が出來ぬ、如何なる秘密のひうんで居るのか知れない、しばらくすると水竿の音高く、慥に小舟が僕の前を横切つた、それが止むとひどしく沖の方より、櫓の軋る音、船歌に調を合して洩れ來る、稍々佇んで居る內霧の中より大な船が現はれ、ほばしらも見え、遂に色黑の船頭をもみとむる事が出來た、やがて船の後よりズンズン晴れて來る朝霧、僕を越ゑて尙西へ西へと晴れて行く、大空の星は漸く薄らぎ、東の空の紫雲は見る見る紅さした、間もなく日も出るであらう、山の方より烏が飛で來る一羽、二羽

○世をはかなみて　　山根碧雲

世に捨てられて煩悶、遂に弱者となりぬ、煩悶の浮世に反抗して快樂の日を送る事能はざりき

嗚呼我は浮世てふ强者に壓せられ永久にとりひしがれたり、未練、我は遂に未練を去る能はざりき

世を怨むや實に〳〵、幾度か死なんとし、幾度か思ひ止まる心に俠ひて强いて其實を現はさんとはせざりき、これ我の意氣地なき故なり

世は遂に我に滿足を與えざりき、噫、　しかし、これが、浮世か、

生れ來て心の儘に何事も任せぬものは憂世なり　鳧

○會友消息

◎會友山本福太郎氏（平田町長）は本縣の小學校教育に關する賞與規程により初等教育上功績顯著なりと認められ賞金を受けられしを以て祝詠を贈られ度候

◎會友常松憲造氏（曉月）は輕重兵一年志願兵として、同玉木與吉氏（雪華）は步兵として本月末出發濱田二十一聯隊へ入營せられ候、文人にして將に武人たるべき二氏の爲に可成贈詠あらん事を希ふ

◎會友關さだ子氏は八束郡惠曇村宮永安麻呂氏に嫁し改姓せらる可成祝詠を寄せられん事を希ふ

◎會友原佐太郎氏（不咨）は九月以來病床に臥せられしも靜養遠からずして其輕快なるべきを期せり然るに何ぞ計らん容体益々重きを加へ藥石効盡き遂に十月二十四日四十七歳にして不歸の途に就かる嗚呼無常悲哀の極なるかな

葬儀は菩提寺淨土宗淸心山極樂寺に於て行はれ木佐支部長及び各幹事會友會葬し來間年枝は支部を代表して左の歌を手向く

原不咨ぬしの靈前に　年枝

言の葉の花を殘してゆく秋の
紅葉と散りし君をしそ思ふ

わか室にうつりし君か言の葉の
花のさかえを祈りし物を

秋の原露ときえにし君といつ
歌はんものかみやひをの友

雁はまた歸り來ぬへき秋にして
君はいつこに出ていぬ覽

右哀報す

尙ほ不日氏の爲に追悼會を營み度に付期日確定（松陽新報、山陰新聞紙上にて御承知の事）の上は御繰合せ御參會を希ふ追悼兼題左の如く定む

秋・懷・舊・　一人數首

右は可成速に御詠出、豫め來間幹事へ迄御送り下されたし短冊色紙等に御したゝめあらは一層都合よろしく候

◎原不咨氏の逝去を惜みて　野崎主事

うの花の垣ねを出ていかなれは
しての田長の跡はれひけむ

うの花の垣ねを出て如何なれは
闇路の旅にいてましにけむ　仝　薫子

○新入會友（十一月）

簸川郡窪田村　福谷玉之助（右金本松下紹介）
大原郡屋裏村　（啞聲）平井哲郎
能義郡安來町　（果堂）富田慶之助
大原郡加茂村　（鏡花）河口猪四郎
八束郡講武村　木村榮三郎（右黑田麻山紹介）
伯耆國淀江町　（弘道）吹野政一（右原彩雲紹介）
簸川郡今市町　（紫光）古川省三（右木村つね紹介）
飯石郡東須佐村　須佐建親（右手錢謹一紹介）
同　（劍溪）西村百太郎
同　（机山）板垣賢三郎
飯石郡東須佐村　板垣松次郎（右須佐建親紹介）

計九十名

○雅號披露

霞香ヲ（醉香ト改ム）（盤峯）植田喜次郎
小林貞太郎

以鉛版代謄寫

平田　報光社印刷

●緊急廣告●

○年始用葉書印刷（葉書代共）

普通印刷　五十枚以下　金壹錢九厘
五十枚以上　壹枚ニ付　金壹錢七厘
御嗜好印刷　五十枚以下　壹枚ニ付　金貳錢
五十枚以上　金壹錢九厘

再度刷ハ拾枚毎ニ壹錢五厘增

尙御嗜好ニ依リ和歌等ノ印刷ニ應候見本御入用ノ向ハ御一報次第御送リ申上候

○名刺印刷　普通八號形名刺　百枚ニ付　金拾參錢

但各種名刺モ大ニ割引申上候

印刷業
蠶卵臺紙
蛾袋販賣
諸新聞取次

報

出雲國平田町
報光社平田出張所
振替貯金口座大坂五七三六番
電信畧號ホウ（又ハ）ホ